広報はやま
平成27年(2015年)
6月号
No.543

昔のことが描かれている絵だよ!

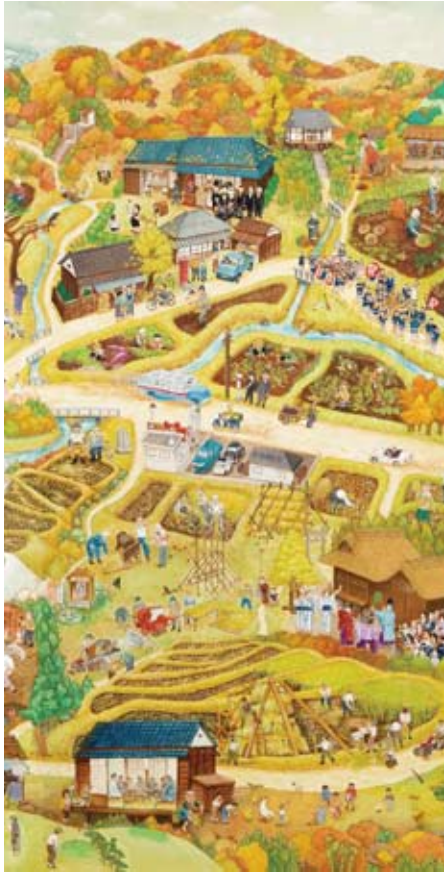
あれは何をしているところだろう?

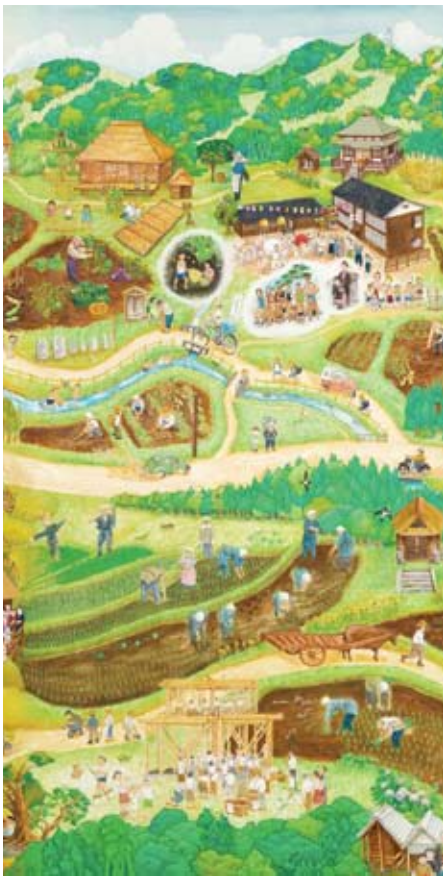
特集

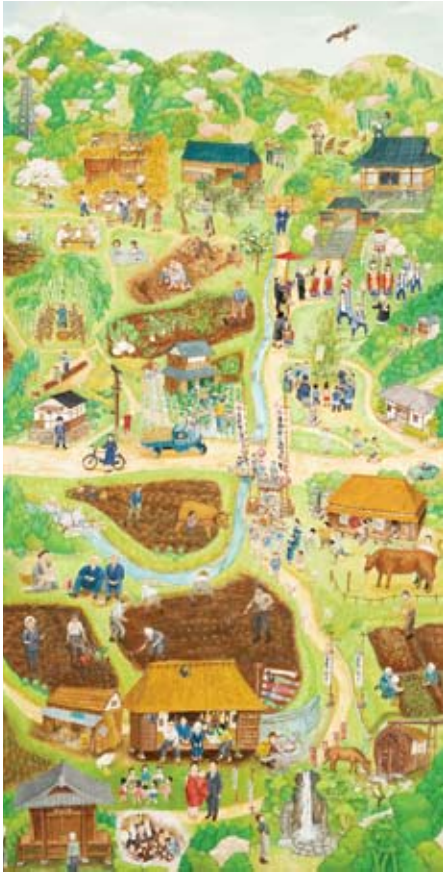
過去を育てて未来を創る
葉山ふるさと絵屏風

今月の目次

特集　葉山ふるさと絵屏風 …… 2
子育てひろば・子どもの保健 …… 10
健康情報・集団健診 …… 12
教育委員会だより「いそぎく」 …… 14
町からのご案内 …… 16
でんごんばん・今月のお休み …… 18
今年度の二つの給付金 …… 20
新しい町議会議員 …… 21
介護保険料が改定されました …… 22
国民健康保険料などの納付 …… 22
県立近代美術館・町長コラム …… 23
木造住宅の無料耐震相談会 …… 24







ふるさと絵屏風とは

地域の高齢者たちの記憶を聞き取り、「心のふるさと」のイメージを絵にした屏風のこと。滋賀県立大学の上田先生の提唱した心象図法（詳しくは8ページ）を用い、滋賀県内を中心に多く制作されています。関東で制作されるのは葉山町が初めてです。

過去を育てて未来を創る

葉山ふるさと絵屏風（えびょうぶ）

昭和 30 年代頃の木古庭・上山口地域を描いた「葉山ふるさと絵屏風」が完成しました（上の 4 枚の写真）。第一扇（右）から春、夏、秋、冬とし、右から木古庭、左は滝の坂隧道までが描かれています。

美しい里山の景色

町には『にほんの里100選』に選ばれた上山口の棚田があることをご存じですか。この地域では古くから農業が営まれ、自給自足の暮らしをし、人々は助け合いながら生きてきました。

現在は都市化が進み、生活は便利になったものの、少子化や人々の交流が少なくなったとされています。これは社会全体の問題であり、もちろん町の課題でもあります。

地域の課題を地域で

文化継承や里山保全を目的に、町内会と企業の協働で絵屏風が作られました。「協働」とは、様々な団体が同じ目的を達成するために、協力して働くことを意味します。

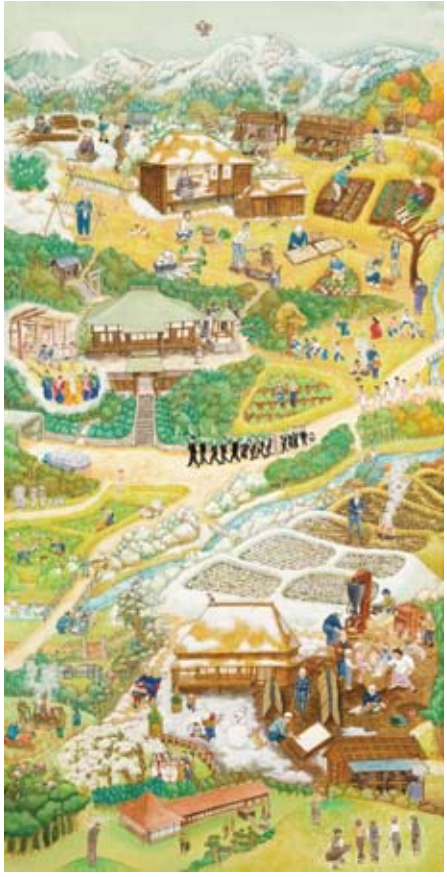
絵屏風制作を通じて感じた町のこと、そしてこれから継承していくものとは。

地域の課題を地域で解決しようとしたこの取組みを通し、皆さんも改めて町のことを振り返ってみませんか。

☺ 5月9日（土）のお披露目式

制作に携わった町内会の人や企業、大学や地域の人が集まり、絵屏風が披露されました。写真は除幕式のようす。

完成した絵屏風は上山口会館で保管されるほか、小さなレプリカを町役場２階政策課カウンターに飾っています。



「伝統や文化を語り継がなければ ふるさとらしさがない町になってしまう」

絵屏風を活用して、文化などを後世に伝えることを目的に、「ふるさと絵屏風継承会」が立ち上げられました。

「小学校で野菜づくりや田植え体験などはあるものの、子どもが農業に触れる機会は減っている。葉山の子も都会の子もさほど変わらないだろう。」と会長の岩澤さんは語ります。

「絵屏風に描かれているように、昔の子どもは農業や家事を手伝い、幼い子の面倒を見ていました。ゲーム機がないから自然の中で遊ぶことしかできなかった。その中で大人の生活を学び、自然の厳しさを感じてきたのです。」

今の子どもには、「自由な発想で絵屏風を見てほしい」と制作責任者でもある岩澤さん。

「昔の生活が正しいとか、こう戻すべきだ、なんて考えを押しつけることはしたくありません。しかし、地域ならではの生活文化を目にすることで『ここは大切だから残したい』とか逆に『ここは良くなかったから直そう』と町のことを考えるきっかけになってほしいですね。」

また、対象は若者だけではありません。岩澤さんは「町には多くの高齢者がいますが、その知識や経験を生かしきれていない。絵屏風にこんなものが描かれている、昔はこんな遊びをしていたなどと地域の子どもに語ることで、高齢者も生き生きとするでしょう。」と提案しています。

「この町で色んなことを学びました。しかし、このままだと大切なふるさとが「らしさのない町」になってしまうと思ったんです。育ててくれた町に、少しでも恩返しをしていけたら嬉しいです。」

ふるさと絵屏風継承会

会長 岩澤 直捷（なおかつ） さん

上山口で生まれ育った岩澤さん。この地域ならではの「助け合いの精神」、「おすそわけの文化」を今後も大切にしていきたいと話してくれました。

木古庭町内会×上山口町内会×大和ハウス工業

信頼によって結ばれた絆

この取組みは、葉山の里山を所有する大和ハウス工業が町内会に声をかけたことがきっかけで始まりました。制作について、木古庭町内会の伊東強会長（写真左）・上山口町内会の倉林彰会長（中央）・大和ハウス工業株式会社の岩橋芳郎さんにお話を伺いました。

―プロジェクトのきっかけはどんなものですか？

岩橋　大和ハウスには、木古庭・上山口に100万坪の社有林があり、環境保全・活用の目的で2011年度に葉山の森プロジェクトを立ち上げました。動植物の調査、山の周りに住んでいる人への聞取りなどを行う中で、郷土史研究会の今井さんに出会い、またその頃に滋賀県立大学の上田先生のお話を聞いたんです。ただ絵屏風を作るだけじゃない、制作を通して人間関係を育む、まさに当社が目指していたものと同じだと思い、「絵屏風プロジェクト」の土台が出来上がりました。

倉林　初めは今井さんから相談があって、面白そうだけど、なんとなく「大和ハウスの思惑はなんだろう？　本音は？　企業だから儲けるための仕組みは？」などと勘ぐっていました（笑）。

伊東　私も初めはそう思ったのですが、担当者の岩橋さんの人柄もありまして、とにかく一緒にやってみようと思えました。

―そこからの流れは？

倉林　まずは五感アンケートを約100人に送り、8割近くを回収し、地域の人に多くの協力をいただきました。

岩橋　協働が大きなテーマでしたから、地域外でなおかつ若い人も参加できないかと考え、関東学院大学の学生に声をかけることになり、絵の描ける人を集めました。

伊東　学生には、パソコンでアンケート結果を分類したカード作成でも大きな力をもらいました。でも、絵を描くにはどうしても「地域への思い入れ」とか「情熱」を伝えることが難しかったんですね。そのため上山口町内会の顧問である岩澤さんが大学へ出張して講座を開くなど、コミュニケーションを多く図るようにしました。

倉林　町内会同士や大和ハウス、学生と意見が大きくぶつかることがなかったのは、丁寧で小まめなコミュニケーションによって信頼関係が築けていたからだと思いますよ。文化祭での中間報告でも、地域の方から「早く完成した

総勢 1,500 人が関わり、3 年がかりの制作に

アンケートや聞取り、写真を提供してくれた地域の人、構図を練った地元の有識者、絵コマ描きをした関東学院大学の学生、絵師、地元の表具店など、制作には多くの人の手がかかっています。

2012 → 2013 → 2014 → 2015

聞き取り会

2012 年 11 月に説明会を開き、五感体験アンケート（昔を思い出す時に目に浮かぶ風景や匂い、手触りなどを答えるもの）を実施しました。翌年２月には、その五感にまつわる思い出を話してもらう「聞き取り会」を開催しました。

里歩き

2013 年６月から関東学院大学の人間環境デザイン学科の学生が加わりました。アンケートや聞き取った内容、集めた写真をパソコンで整理するとともに、地域を実際に歩いて葉山の里山の雰囲気、匂いを感じるための里歩きを実施しました。

絵コマ描き

2014 年４月から、6 回の制作会で約 300 枚の絵コマを描きました。学生は写真を見ながら下絵を作成し、昔のことでわからないことは地域の人に聞きます。同年７月の中間報告会では、学生から地域住民へ絵屏風の全体イメージを紹介しました。

絵師による制作

2014 年 12 月には、表装された和紙に、地元在住の３人の絵師が絵を描き始めます。白黒の下絵では表現できなかった色を再現するため、ここで改めて調査が必要になりました。絵師はそれぞれ山並みなどの風景、動植物、人などと分担し、描きました。

表装作業

今年４月に絵が完成し、最後の表装を仕上げたのは、守谷表具店の守谷周市さんです（葉山町一色・写真右）。アクリル絵の具を使った屏風を表装するのは初めての試みとのことでしたが、地域の取組みに協力する気持ちで仕上げてくれました。

ものが見たい」という声が多く、励みになりました。

―完成していかがですか？

伊東　こんなにも時間や負担がかかるとは思いませんでしたね（笑）。最初は町内会運営の片手間でできると思っていたけど、振り返ってみると、町内会事業の大半を占めるほどになりました。

岩橋　ここまで絵のレベルが高いもの、そしてこんなにたくさんのストーリーが盛り込まれた形になるとは思っていませんでした。すでに活用されている他県の作品と比べても、「人が生き生きと暮らしている姿を描いた点」では、一番だと思います。

倉林　昭和30年代頃を絵にしたのは、「機械化しているものと昔ながらのもの」、どちらもある変遷の時期を表現したかったからなんです。しかし、それは今考えてみると「今の時代は機械化が進んでいるけど、一方で手作りの大切さを見直している」という点で、良い時期を選べたと思っています。

伊東　今の子どもは一人でゲーム機を使って遊ぶなど、周りと協調しなくなっているのも事実。屏風に描かれているように、みんなで楽しむことも感じてほしいですね。

岩橋　絵を見て昔を語るだけじゃない、未来に生きる子どもたちが将来を考える時、この絵がヒントになれば嬉しいです。

―他の地域に住む皆さんへ

伊東　今の葉山は「海」の印象が強いかもしれません。しかし、歴史を感じる里山の存在も忘れないでほしいです。

倉林　今回描かれたのは町内のごく一部の地域ですが、他地域の皆さんも同じように自給自足の暮らしを昔はしていました。そこから学んだものを今の時代にも生かせることを感じていただければと思います。

岩橋　今回の取組みは、町内会の皆さんと何度も話し合いを重ねたり交流を深めたりすることで、信頼関係を築けたことが大きな成果に結びつきました。これからも地域と協力してまちづくりに励みたいと思います。

「制作を通じて、葉山が第二のふるさとに」

下絵 中尾　睦美さん（制作当時の関東学院大学４年生）

昔のことや葉山町のことは、私たち学生にはわからないことばかりで初めは戸惑うこともありました。でも町内会や地域の方がいつでもそばにいてくれて、直接教えてくれたり、写真を見せてくれたり、一緒に里歩きをしてくれたりと親身になってくれたんです。

また、年上の方とのコミュニケーションをとるということも勉強になりました。今年から社会人になりましたが、その経験を生かせていると実感しています。

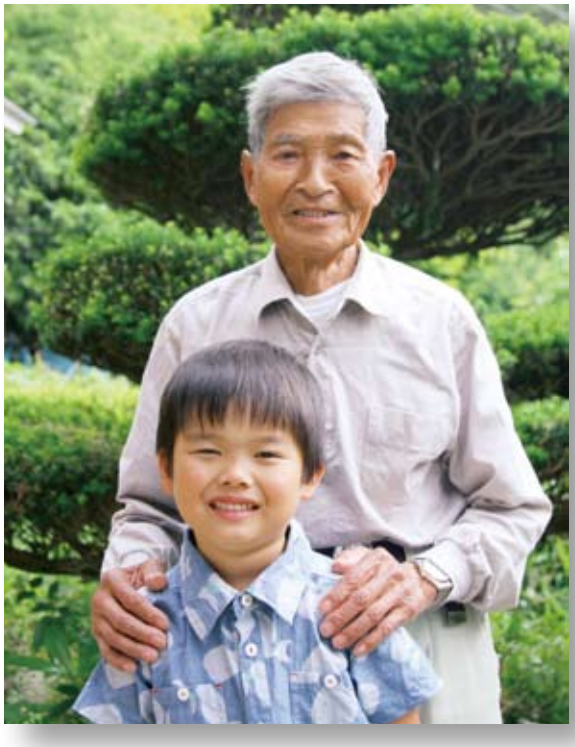
制作を通じて、皆さんがこの町を愛する気持ちを感じ、それと同時に、私も葉山を第二のふるさとだと思えるようになりました。友人と、そして将来家族と、この町を訪れた時に絵屏風がどのように活用されているかも楽しみです。

絵屏風の制作を通して人と出会い
絵屏風を前にしてまた人と出会う

絵師の皆さん（左より）大八木俊也さん（グラフィックデザイナー・上山口在住）・小島栞さん（絵画教室の講師・木古庭在住）・岩澤慶典さん（画家・上山口在住）

大八木　東京から引っ越してきて約13年。まさに絵屏風のような山の景色にひかれてこの地を選びました。今回絵を描くのにあたって、外から来たからこそ「この地域のことを知りたい」という気持ちを強く持てたと思います。

小島　地元なので知っているつもりでしたが、今までは表面的にしか捉えていなかったことを実感しました。私は野菜や花などの植物を中心に描いたのですが、



「この絵をきっかけに昔の話を伝えたい」

写真提供 永津　和夫さん（上山口在住）

絵屏風を見て、懐かしい風景がよく再現されていると感心しました。足踏み式の脱穀から動力を使っての脱穀に変わったこと、牛をひいて田を耕していたのが耕運機を使うようになったことなど、農業の効率化が図られた当時を思い出します。

私や同じ年代をここで過ごした人たちは、この絵を見てすぐに内容がわかるでしょう。でも子どもや孫、ましてやまだ5歳のひ孫には伝わりづらい。日頃から昔の話をしてやれたら良いとは思いますが、こういった絵があれば一層話がしやすいですね。今は住宅が増えて田んぼや畑が減りましたが、これからもこの地域ならではの暮らしを守っていきたいと改めて感じました。

（写真はひ孫の佑真くんと）

人との出会い

花の色をよく観察するように心がけたり、行ったことのない道を通ってみたりする中で、新しい発見もありました。

岩澤　一人の作品では、いつも完成はなく、まだまだ描きたい部分というものはありますけど、今回は三人の力を合わせて皆さんの想いを表現することは達成できたかなと思っています。一緒に作業することは少なかったけど、「ここ描いたからここをお願いします」とかメモでのやりとりも新鮮でした。

小島　そのメモを見て、「よし頑張ろう」って気持ちもわきましたね。お二人に負けないように私も一生懸命やらなくちゃって（笑）。約3か月間集中して絵を描いてきましたが、そのやりとりがなくなるのは少しさびしい気持ちもします。

大八木　制作中に、「これで本当に皆さんの思いを形に出来ているのか」と悩んだこともあります。しかし途中で婦人会の方にたまたま見てもらった時に「これ○○さんの家みたい」とか「これ私よ～」とか皆さん自分のことに置き換えて見てくれたんですね。こういった反響もあったので、描ききれたのかな。

岩澤　この構図で現代の姿を描いたらまた面白いなとか、完成してからも色々と考えてしまいますね。また、完成した絵だけでなく、お二人と励ましあって取り組んだという過程も大切な思い出になりました。

岩澤さん「一人で絵を描く時とは異なり、共に励ましあって制作できたことが思い出になりました」

ふるさと絵屏風提唱者
滋賀県立大学　助教
上田洋平先生に聞く！

地域の真価が問われる時代

地方創生元年とも言われる時代を迎え、今まで地域が育み、守り伝えてきた「自然のめぐみ・歴史のめぐみ・人のめぐみ」のありよう、それをどう生かしていくかが問われることになります。

自分たちのふるさとにないものをねだるのではなく、あるものを探し、一つひとつ拾い上げること。ふるさと絵屏風の制作は、まさにその作業です。

人のめぐみに出会って

出来上がった葉山ふるさと絵屏風を見ると、この地域が「自然・歴史・人のめぐみ」すべてにおいて、いかに恵まれていたかがわかります。制作を通し、この町、木古庭・上山口の本当の意味での豊かさや素晴らしさを感じた人も多くいたと思います。

あわせて地元にこんな絵を描ける人がいたんだとか、こんな話をしてくれるお年寄りがいたんだとか、そんな出会いにも驚いたことでしょう。みんなのふるさとを愛す気持ちにも改めて気付いたのではないでしょうか。

絵の完成はスタート地点

ふるさと絵屏風をめぐる活動は、絵の完成がゴールではありません。地域の歴史や記憶を保存するだけではなく、その過程で気づいた様々な地域のめぐみについてみんなで語り合いながら「絵を使い、育てていくこと」が大切です。そうやって、みんなで地域の思い出を育て、地域の未来を育てるのです。

ふるさと愛を世界へ

絵屏風の使い道は工夫次第でいくらでも広がります。町内の他地域の人へ、町外・県外・国外へ、子どもへ、若者へ、高齢者へ。

この町を愛する皆さんが、絵屏風を通じてふるさとへの愛を語り継いでいかれることを期待しています。

制作中、上田先生は滋賀県から何度も駆けつけました。時には町民の皆さんや学生と里歩きをすることもありました。

「絵屏風は使い、育てていくもの大切なのは完成してからです」

地域に暮らす一人ひとりの「五感体験」を集め、語り合い、愛する地域「心のふるさと」のイメージを絵に仕上げていく心象図法の提唱者である滋賀県立大学の上田洋平助教。滋賀県内での取組みをはじめとして、多くの絵屏風づくりに携わっています。今回は、「ふるさと絵屏風」と地域の関係、今後の活用について伺いました。

共なるふるさと

作詞／岩澤　直捷
作曲／岩橋　芳郎
編曲／阿部あゆ子

このふるさとで　私たちは共に育った
父と母の言葉　道しるべに後をたどった
季節はめぐり　野山色づき
鳥が歌えば　命の営み　響く
ああ…　共に共に生きる　心の花
咲かせ続けよう　ずっとずっと
このふるさとに

このふるさとで　私たちは共に学んだ
自然の豊かさの　大切さとありがたさを
次代の風が　吹いた時でも
子らに誇れる　明るい未来を　創る
ああ…　共に共に生きる　心の花
咲かせ続けよう　ずっとずっと
このふるさとに

＊『共なるふるさと』とは…葉山ふるさと絵屏風の完成を記念して作られた曲です。ふるさと絵屏風を記念した歌が作られたのは日本で初めての試みとのこと。作詞を絵屏風継承会の岩澤さん、作曲を大和ハウス株式会社の岩橋さん、編曲を当時上山口小学校の音楽教諭であった阿部さんが担当しています。

過去を育てて、未来を創る そんなまちづくりを葉山から